



やさしいアンドロイドの作り方 —SFはどこまで現実になるのか—

著者：福江 純

大和書房，203 頁，定価 1,500 円

読み物

お薦め度

☆☆☆☆

私が修士課程だった頃、電子メールのやりとりは極く一部の友人たちとだけであったし、大学に入った頃の（見たことはないが）巨大なワープロは一台 100 万円もしていた！それが今や、机に座って世界を旅でき、ワープロに漢字を教えてもらっている。こんな卑近な例ならずとも、我々人間社会の（主に科学の面での）目覚ましい変化は、誰もが感じているところだろう。「もっとここが便利になったら」といった物質的欲求から、「鳥のように空を飛びたい」「月に行ってみよう」といった不可能に思えた純粹無垢な夢まで、いつの時代でも科学の進歩の原動力となってきたのは、そういった「人の夢の積み重ね」である。

科学を志した人もそうでない人も、誰しも少年少女の頃は（あるいは今でも）、「宇宙人っているの？」「タイムマシンは作れるの？」「不老不死は実現するの？」という夢や疑問を胸に抱いたことと思う。本書はそういった 10 個のメジャーな疑問に対して、現代科学の持つ可能性、将来性を視野に入れながら、「ハードな宇宙や時空から、ソフトな遺伝子や進化、そしてハートな脳と心まで」を、実に解りやすく、また著者らしい軽妙な語り口で答えてくれている。（題名のとおり、How to make アンドロイド、が懇切丁寧に図解されている、わけではない。念のため。）

本書には、それだけでもすでに著者を尊敬、崇拝するに十分すぎる程のリファレンスが（解説付きで）出てくる。それらが巧みに引き合いに出されることで、真面目に考えると脳がパニックの内容もうまくイメージ化でき、理解が得やすい。リファレンスを読んだことがあれば、「あ、こういう観点、解釈もあったのか」と、本論とは関係のないとこ

ろで感動し、未読であれば、あれもこれも読んでみたくなるような落とし穴が待っている。科学と SF を心から愛する著者ならではの、である。（出版がもう少し遅かったら「バイオハザード」に関して著者のもう少し突っ込んだ見解が聞けたかもしれなかったのが残念！）

人は夢の実現への努力をすることで進歩してきた。人間の進歩＝科学技術の発展、と思われている。一方で、人間の社会での突出した科学の発展、進歩に対する危惧がある。果たして、人の心はそれに見合った進歩を遂げているだろうか？著者はこの点について警鐘を鳴らすことも忘れてはいない。人が不死に近づき、計算機が進化し、遺伝子操作によって神話時代の生物が現実になる。どれも技術的には達成可能かもしれないが、重要なのは、それを実現し利用するのは精神（心）を持った「人」である、という点である。どんなに素晴らしい技術が生まれても、「人間とはなにか」「生きる意義」を忘れては無意味であり、危険である。人と人とが理解しあうこと（これが何と言っても一番難しい！）、理解しあう努力、がなければ破滅につながる。このへんをきちんと随所で、しかしイヤミなくさりりと述べているあたり、著者の「人」に対する愛情がじわりと伝わってくる。

科学に携わる者のみでなく、科学に様々な期待を（無意識にでも）かけている現代人が、常に持ち続けたい「夢」と「忘れてはならないこと」が本書の底流をなしている。日々の仕事や雑事に追われ、ほんやりとなんとなく研究していたこの頃、宇宙に限りない憧憬を抱いていた少女時代の原点に、今一度立ち返らせてくれた一冊であった。

油井 - 山下由香利（通信総合研究所）